

会報三月号 正解はない

目次

- ・ 宇宙には正解はないが、人間社会は正解を定める
- ・ 宇宙には正解はないが、方向性はある
- ・ 有限の人間が無限の宇宙を参照する理由
- ・ 持続してきた構造
- ・ 人間の姿
- ・ 人間は有限を引き受け、無限を見上げる

● 宇宙には正解はないが、人間社会は正解を定める

宇宙に正解がないのは欠陥ではなく、「性質」だ。人間社会に正解を定めるのは真理ではなく「機能」だ。この二つは同じ土俵に置かれていない。にもかかわらず人は混同する。そこから違和感も暴力も生まれる。

宇宙には正解がない。なぜなら宇宙は「問いに答える装置」ではなく、「生成し続ける現象そのもの」だからだ。正解とは本来、①目的が固定され、②評価者がいて、③到達点が設定されているときのみ成立する。だが宇宙には外部の評価者がいない。ゴールもない。善悪もない。あるのは変化と生成と消滅だけだ。星が生まれても、爆発しても、宇宙は成功とも失敗とも言わない。ただ起きる。だから正解という概念自体を置くことができない。

一方で人間社会は正解を定められる。これは人間が「宇宙より未熟だから」ではない。有限な集団が、有限な時間と資源の中で、破綻せずに協働するために必要だからだ。人間は個体としても集団としても脆い。放っておけば判断は分裂し、責任は曖昧になり、争いは拡大する。そこで人間は「正解」を作る。法律、規範、ルール、試験、評価基準、マナー。これらは真理ではない。便宜上の運用・循環装置だ。

従って、人間社会の正解は、宇宙の正解ではない。人間が「和を保つ」「衝突を減らす」「行為を揃える」「責任を切り分ける」ために、意図的に設計された仮設物だ。だから正解は時代で変わり、場所が変わり、集団で変わる。変わらなければ社会は死ぬ。どこかに変わらぬ正解があるのではなく、正解を更新し続ける必要がある。

ではなぜ、人間は正解を絶対化しがちなのか。理由はシンプルだ。正解は安心を与えるからだ。正解があれば、考えなくて済み、責任を預けられ、外れた者を裁くこと

ができる。有限な存在にとって、これは強烈な誘惑となる。しかし固定した正解は道具から偶像に変わり、偶像化された正解は人を守る代わりに、人を縛り、やがて争いを生む。

● 宇宙には正解はないが、方向性はある

宇宙には正解がない。だが方向はある。「生成するか、閉じるか。続くか、途切れる」か。これは結果として示される。宇宙はこの方向性を、無限の試行錯誤の末に体現している。一方、人間社会はこの方向性をそのまま扱えない。抽象的すぎるのだ。だから人間は、宇宙の方向性を有限サイズに圧縮し、扱える形に翻訳する。それが社会的正解と呼ばれる。

問題は、翻訳された正解を「原文」だと誤認したときに起きる。地図を地形だと信じたとき、人は崖から落ちる。正解は地図だ。地図は便利だが、地形ではない。地形を無視して地図を守ると、やがて必ず破綻する。だから有限な人間は、二重の視座を必要とする。一つは、社会を動かすために正解を使う視座。もう一つは、正解を相対化するために宇宙を参照する視座。宇宙を参照するとは、「正解を捨てる」ことではない。正解を仮のものとして扱い続ける力を保つことだ。宇宙には正解がないという事実を知っている人間だけが、正解を柔軟に更新できる。逆に、宇宙を見失った社会では、正解が神になる。そこでは異端は排除され、変化は拒まれ、創造は止まる。

人間は有限だから、正解が必要だ。人間は無限の内部にいるから、正解を絶対化してはいけない。この緊張関係を生きていける存在こそが人間だ。

宇宙に正解がないのは、無責任だからではない。全体だからだ。人間社会に正解を定めるのは、傲慢だからではない。有限だからだ。だが、人間が人間で在り続けるためには、正解を作りながら、正解に支配されることなく正解を更新し続けるという、不安定な立ち位置を引き受けねばならない。

宇宙は答えをくれない。社会は答えを作る。人間は、その両方を同時に生きる存在だ。だから、真理という概念にすがって、正解の奴隷になってはいけない。

● 有限の人間が無限の宇宙を参照する理由

有限の人間が無限の宇宙を参照する理由は、憧れでも模倣でも救済でもない。それは、生きるという営みが「有限であるがゆえに、必ず破綻へ向かう構造」を内包しており、その破綻を最小化し、なおかつ創造を持続させるためには、有限の内部だけでは完結できないからだ。人間は有限である瞬間から、時間・身体・認知・資源・感情・視野、すべてに限界を抱え、その限界の中で判断し、選択し、行為する存在だ。だが有限の内部だけを基準にすると、判断は必ず短期化し、視野は自己中心化し、正解は固定化され、やがて争いと硬直に至る。これは道徳や意志の問題ではなく、構造の問題だ。

無限の宇宙を参照するという行為は、この構造的閉塞を外側から破るための、ハン

マーを持つことを意味する。重要なのは、無限を「到達目標」にしないことである。無限は目標ではない。境界条件だ。有限な存在がどこまで行っても越えられない外枠として、常にそこに在る。だから宇宙を参照するとは、「どうなりたいか」を聞くことではなく、「何を無視すると必ず壊れるか」を読むことだ。

● 持続してきた構造

宇宙は百三十八億年という時間の中で、無数の生成と崩壊を繰り返してきた。その過程で残ったのは、善悪でも正解でも理想でもない。ただ「持続した構造」だけだ。星は燃え尽き、銀河は衝突し、生命は絶滅を繰り返してきた。そのすべてを含んだ上で、なお生成が続いている。この事実そのものが、宇宙が一つの巨大な試行錯誤の履歴であることを示している。有限な人間は、この試行錯誤を自分の人生で再現することはできない。時間も能力も足りない。だから宇宙を参照する。それは、無限の失敗と淘汰が圧縮された「生存可能性のデータ」を読む行為となる。

ここで決定的な点がある。宇宙は何一つ、人間に命令していない。「こう生きよ」とも、「こうすべきだ」とも言わない。ただ、ある方向には生成が続き、ある方向には崩壊が起きるといふ事実を、沈黙のまま示している。人間が宇宙を参照するのは、この「方向性」を掴むためだ。正解を得るためではない。評価を得るためでもない。自分がどちらに向けて歩むか、その向きを誤らないためである。

● 人間の姿

有限な人間が最も陥りやすい誤りは、部分を全体だと誤認することだ。自分の経験、自分の価値観、自分の集団、自分の時代、それらを世界の中心に置いた瞬間、人間は必ず他者と衝突する。なぜなら他者もまた、自分の有限性を全体だと信じているからだ。宇宙を参照するという行為は、この誤認を相対化する。自分は全体ではない、だが無関係でもない。宇宙、無限、大自然の摂理、それらを看破した経書を参照するということは、この位置に自分を置き直す作業なのである。

だから、人間（有限）は宇宙（無限）がこの瞬間に取っている局所的な宇宙の姿であり、無限の運動が一時的に凝縮された宇宙の現象といえる。人間は無限の外にいないのではない。無限の内部にありながら、それを全体として把握できない存在として在る。だからこそ参照が必要になる。内部にいるからこそ、外枠を意識しなければ迷う存在なのである。

易経が「正解」を示さず、「時」を読む書である理由もここにある。無限は固定された答えを持たない。だが、変化の筋道は持っている。人間はその筋道を読み、自分の有限な行為を、より大きな流れに対して破綻しない形で差し出すことができる。これが、意識を持った有限存在という我々に与えられた、宇宙にはない特権であり責任なのである。

●人間は有限を引き受け、無限を見上げる

結論として、有限の人間が無限の宇宙を参照する理由は、無限になりたいからでも、正解を知りたいからでもない。有限であることを引き受けたまま、なお生成・成長・進化を続けるためだ。そして、それが宇宙の姿であり、宇宙の意志でもある。宇宙は答えを与えないが、無視すると必ず破綻するという条件を、変化そのものとして示している。人間はその条件を読み取り、志と在り方として翻訳し、行為に落として破壊と再創造を繰り返していく。

だから宇宙は模範ではない。教師でもない。裁判官でもない。参照図である。人間はその参照図を見ながら、有限な一步を踏み出す。踏み出すかどうか、どう踏み出すかは、人間にしか決められない。その自由と不安を引き受けるために、人間は無限を見上げる。これが、有限が無限を参照する理由だ。

今月も健康と健闘を。